第５章　反復帰論の構造と特質

はじめに

１　反復帰論にとっての日本復帰

⑴日本復帰までの経緯

⑵復帰への批判

２　反復帰論者が想像する沖縄

⑴最小単位

⑵規範

３　反復帰論者にとっての抵抗対象

⑴新川明にとっての抵抗対象

⑵岡本恵徳にとっての抵抗対象

⑶川満信一にとっての抵抗対象

おわりに

第 5 章　反復帰論の構造と特質

> 沖縄人の意識の基層を規定している日本と日本人に対する「異質感」＝「差意識」を、否定すべきマイナスの精神志向だとして恥じ、これを否定し、排撃するのではなく、むしろ逆に、これを日本の国家権力を決定的に相対化していくための、決定的なプラス要因として思想的に取り込むことこそ迫られていると私は考える
>
> 新川明「＜憲法幻想＞の破砕」『現代の眼』（1970 年 11 月号）

はじめに

本章の目的は、1960 年代後半に登場し、沖縄の言論および思想に影響を与え続けている反復帰論の構造と特質を明らかにすることである。反復帰論者としては新川明のほか、川満信一、岡本恵徳らが知られているが、彼らの主張を比較、考察した研究は管見のかぎりそれほど多くはない。その理由として、反復帰論者は沖縄の日本復帰に反対し、沖縄の独自性を強調し沖縄の自立を主張したが、各々の立地点は幅広く、共通項を見出しにくいためと考えられる。そこで本章では彼ら個々の論考における沖縄に関する議論し、彼らの沖縄認識を抽出、比較することによって反復帰論にとって沖縄とは何であったかを明らかにしていく。換言すれば、反復帰論は沖縄をどのようにデザインしていたかを考察するということである。反復帰論者各々の沖縄認識の共通点および相違点を明確にすることは、反復帰論の全体の構造と特質を描き出す一助となる。

先行研究では、高良勉が新川、川満、岡本の論考を比較している。高良によれば、新川は沖縄人の持っている「差意識＝異質感」や「異族性」に着目しているのに対し、川満は沖縄の民衆が持っている「共同体意識」に注目した。さらに岡本も「共同体意識」の大きな特徴を「水平軸の発想」と名付け、「共同体的本質」の検討を課題とした。そして川満も岡本も日本国家や国家権力を批判する際には、民衆自身の変革を通して「共同体意識」を積極的に評価した[1]。また、屋嘉比収は新川の論考が 1971 年後半になると、「反国家」の起点を「沖縄」や「沖縄人」から「個の位相」に措定したと指摘している。ここから、自らの内面を穿つ思想であることが鮮明になるのである[2]。さらに仲里効は、新川がインタビューで語った「自分は母親がヤマトゥだし故郷を持っていないが、川満には宮古の久松部落がある」という主旨の部分を引用し、彼らの思想背景の違いを指摘している[3]。先行研究では、彼らの思想の背景では共同体という概念が重要な役割を果たし、三者において相違点が存在している、ということまでは明らかにされている。

そこで本章では、これまでの研究を踏まえながら、反復帰論が生まれ活発に議論がなされた主に 1970 年代の文献を分析することによって、反復帰思想の特徴を明らかにしていく。反復帰論全体の把握に少しでも資するために本研究がまず注目するのは、彼らの考え

る沖縄の「最小単位」である。すなわち、沖縄はどのような単位が積み重なり、集積することによって成り立っていると考えていたのか。次にその最小単位の行動を規定するものを本論では「規範」と定義する[4]。最小単位はどのような思想によって動いているのか、すなわち行動要因は何かを明確にしながら議論を進めていく。そして「規範」により正統性を得た「最小単位」にとっての「敵」に着目する。

本論に入る前に、まず第 1 節では反復帰論が生まれた社会的背景に言及し、反復帰論者たちがどのように「復帰」を捉えていたかを概観する。第 2 節では反復帰論者の沖縄認識をその「最小単位」と「規範」に着目しながら考察する。そして第 3 節では、彼らの想定した沖縄が抵抗すべき「敵」について整理する。最後に、三者の論考の比較を通して明らかになったことを結論としてまとめる。

1　反復帰論にとっての日本復帰

(1)日本復帰までの経緯

沖縄の日本復帰は、1964 年、自民党総裁選挙において沖縄返還を掲げた佐藤榮作内閣の発足によって、日米間の政治課題となった。67 年の佐藤・ジョンソン共同声明によって米国による沖縄支配から日本への返還が公式に確認され、69 年の佐藤・ニクソンによる日米共同宣言で沖縄の「核抜き、本土並み、72 年返還」が発表された。アメリカはベトナム戦争の行き詰まりに直面し、極東政策の転換点を迎え、沖縄支配よりも在沖米軍基地の確保に重点を置いていた。日本も沖縄返還を悲願としながらも、必ずしも冷戦構造下にあるアジアからの米軍の撤退を望んでいたわけではなかった。在沖米軍は残すという、両者の思惑が一致した結果としての沖縄返還であった[5]。

一方、1950 年代半ばの米軍による強制的土地接収を契機として「島ぐるみ闘争」と呼ばれた沖縄の民衆運動は高まり、その後の復帰運動へとつながっていく。復帰運動の大きな要素の一つとして、戦争反対・平和の要求があった。67 年の佐藤・ジョンソン共同声明では返還について言及すると同時に、日米安保および在沖米軍基地の重要性も確認されていた。沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）は、その声明に強く抗議し、基地の撤去なくして復帰はないという方針を明確に打ち出す。69 年の日米共同声明の「核抜き、本土なみ、72 年返還」も実質的内容は核つきのみならず自衛隊配備による軍拡であるとして、復帰協は抗議声明および抗議集会を行っている[6]。

以上のような社会的動向を背景として、反復帰論は登場した。しかし、反復帰論が生まれた要因としてはそれだけではなく、論者各々の日本体験が大きく作用している。例えば沖縄タイムス記者であった新川は、1957 年に鹿児島支局へ転勤となる。このころの新川にとって日本は「祖国」であり、沖縄が目指すべき絶対的目標として認識していた[7]。日本で新川は異民族が支配する沖縄から離れ、憧れていた「祖国日本」での生活を享受するはずであった。しかし、実際には街頭テレビから君が代が流れたとたんに直立不動になる群集

という異様な風景にショックを受け、日本に対する失望が始まる[8]。

また、岡本も東京教育大学大学院修士課程に在学中、1960 年の安保闘争に参加していたが、樺美智子の死に直面する。それを発端として既成政党や組織に不信を抱くようになるが、沖縄問題を基本政策として掲げていた日本共産党のみにか細い信頼をつなぎとめていた。しかし、原水爆禁止運動の分裂によって、岡本は日本共産党への信頼も失う。それは完全に日本への失望を意味していた[9]。つまり、社会的動向のみならず、個人的経験も日本への失望の大きな要因であった。

(2)復帰への批判

沖縄の復帰運動は、新川によれば日本国憲法の持つ平和主義というユートピアへの幻想から始まっていた。そして、日本に復帰すればすべてよくなるのだ、という素朴なナショナリズムを煽り立てるものであった。それは基地の永続化を図る日米両政府の意図に一致するばかりか、補完する作用も持っていた[10]。また、意識的か無意識的かを問わず、沖縄が復帰することによって日本という国家へ組み込まれていくことは沖縄の個性を没することであり、国家という権力に飲み込まれることである。新川にとって 1972 年の復帰は日米両政府の権力者によって引かれた不条理なレールでしかなかった。新川にとって国家は不可視の強制力であり、その強制力によって人間の思考と行動を規制し、さらに国家それ自身を補強させる存在様式であった[11]。このような同化志向を理解するために、明治政府によって強権的に推進されてきた同化政策に言及している。日本政府による皇民化政策に対応し、沖縄から日本への同化志向の例として、参政権請願運動を行った謝花昇や、沖縄学の父といわれる伊波普猷を挙げている。謝花は当時の沖縄県知事と鋭く対立したという意味では反体制的な運動であったが、その発現形態として参政権を求めたところに日本ナショナリズムへ沖縄を統合する役割を担った[12]。伊波の「日琉同族論」も「同化するのが幸福を得る道」という信念に支えられたものであり、日本同化のためにその知的エネルギーを投入し、日本国家権力が上から進める皇民化を補強する役割も担い続けた、としている[13]。

それに対し岡本は、復帰運動を支えていたものを単純な「本土志向」ではなかった、とする。復帰運動は沖縄の人々の自己回復の運動であった。自分たちを自分たちで支えなければ生きぬくことはできないという「共同体的本質」が復帰運動を支え、直接民主主義的な運動形態として現れたとしている。そして「異民族支配からの脱却」が復帰運動の目標として設定されたとき、アメリカに対する異質感や危機感が「共同体的生理」によって増幅された、というのである[14]。しかし、明治以降の政策が沖縄の皇民化を進め、沖縄に元来存在している「共同体的生理」を利用し、天皇を頂点とする共同体に組み変えた。復帰運動は、沖縄に根差した「共同体的意志」が天皇を中心に据えられたまま機能し具現化した結果であるとしている[15]。

また、川満は復帰運動を琉球処分から引き継がれてきた「近代化した本土」と「後進的

な沖縄」という伝統的な思考様式が噴出した過程であり、この二項対立的思考が国家への凄まじい求心力を形作った、としている。その根本的な要因は天皇制イデオロギーに求められた。廃藩置県以降の沖縄の人々は自由民権や啓蒙思想から遮断され、忠勇の皇民なることによってのみコンプレックスを解消しようとし、内面化された天皇制イデオロギーが戦後の沖縄に残された結果、天皇制批判が行われることはなかった、という。そして米軍支配への抵抗運動は復帰運動へと横すべりし、「抗議」から「陳情」へと変化したゆえに、復帰運動は革新性を無くし反革命へとからめとられてしまう、というのが川満による復帰運動への解釈であった。さらに川満は沖縄で国家への幻想が形成された理由として、国家と個人の関係が直接的なものではなく、絶えず島的共同体に接触、透過した上で屈折し成り立つ近代以降の沖縄の思考様式を挙げている[16]。

以上、三者による復帰運動の理解について簡略にまとめたが、その比較からふたつのことがわかる。ひとつめは三者とも、復帰運動が廃藩置県以降推し進められた日本同化志向の影響を受けていると指摘している点である。特に皇民化政策および天皇制イデオロギーについて鋭く批判を行っていた。ふたつめは、新川は同化政策の反作用として個人に着目し、岡本と川満は共同体に着目しているということである。新川は国家によって人間の思考が規定されているという点に立脚し、その証左として謝花昇や伊波普猷を挙げていた。しかし、岡本と川満は個人の反作用というよりは共同体からの反作用として理解していた。沖縄の持つ共同体的特質性が国家権力に利用された結果、沖縄の復帰運動が成立した、というのが彼らの主張であった。

反復帰論者が展開した以上の主張は、当時特に革新陣営からは新左翼とほぼ同一視されていた。その理由として、新左翼と反復帰論者たちが共に革新陣営を批判していたためと考えられる。西里喜行は反復帰論（西里による反復帰論には既得権益への固執から復帰に反対する保守派も含まれている）が台頭した背景として、基地撤去が実現しなかった日米共同宣言による「72 年返還」への敗北感、復帰による経済的不利益への不安、日本政府への不信感、日本による差別の歴史という 4 点を挙げている。そして、反復帰論者が主張した国政選挙ボイコット運動の潮流を新左翼が政治的活動に最大限に利用した、としている[17]。また、大田昌秀は反復帰論の思想的原点として、沖縄の近代は日本化の歴史であったとし、日本化が沖縄固有の伝統や文化を抹殺してきたという「苦い経験」を指摘している。しかし、大田は反復帰論者が復帰に反対する理由を、日本に日本国憲法が徹底されていないためであると説く。すなわち、平和憲法を有しながらも自衛隊は年々拡充されていることを証左として、沖縄が帰るべき日本は現在の日本ではなく、平和憲法の理念が徹底された日本である、という[18]。日本共産党主催のシンポジウムでも、反復帰論者たちの主張は「日本国家」を拒否するために日本国憲法を拒否していると解釈され、それこそが反復帰論者が陥っている根本的誤解である、とされた。さらに、現状の「日本国家」はサンフランシスコ条約体系であって、それこそが日本全土、特に沖縄で日本国憲法を蹂躙している、と解説されている[19]。これらの記述からもわかるように反復帰論が登場する背景には十分

言及されているにもかかわらず、その思想的内実に関しては当時の革新側に都合よく解釈されている嫌いがある[20]。

さて、反復帰論者はあるべき沖縄の姿をどのように想像したのだろうか。次節では沖縄を構成する最小単位とその行動要因となる規範に焦点を当てる。

２　反復帰論者が想像する沖縄

(1)最小単位

本項では、反復帰論者が想定した沖縄の最小単位についてまとめる。ここでいう最小単位とは、彼らがある時には沖縄の社会を分析する際に着目し、ある時にはあるべき沖縄を描く際に肝要な部分であると設定した沖縄の構成要素である。

①　新川明による最小単位―個人

新川は沖縄を考える上で個人を重視し、岡本と川満は共同体を重視した。沖縄の復帰運動への理解を比較してもそのことは明らかであるが、あるべき沖縄を想像する際にも新川は個人を、岡本と川満は共同体を重視する視点を持っていた。新川の論考には以下のような表現が見られる。

> 素朴な意識によってみずからの行為を規定する民衆個々が持ち合わせている＜国家に対する忠誠心＞を当然のこととする価値観念や秩序意識を、逆転していく作業を〔略〕すすめなければならない[21]

この記述からわかることは、国家によって規定された「民衆個々」の価値観や秩序を逆転する必要性を新川が強く意識していたことである。新川にとって闘争の原点もやはり民衆個々であり、あくまでも個の位相である。

> 沖縄人われわれの中にある反国家＝反国民たり得る素地は〔略〕われわれの意識の基層のところで息吹いているし〔略〕なお強固に生きて噴出の可能性を秘めている。それを民衆個々の中で内発させていくことこそが、〔略〕日本の体制志向を内部から腐食させていく沖縄のたたかいの原点たり得る[22]。
>
> 左右双方からなされる差別告発論のみによっては、国家体制を打ち、これを破砕してくための変革エネルギーを、民衆個々の内発的営為として誘発させることはできない。〔略〕国家による被害者の立場を逆転して、国家に対する加害者へみずからを転化させる反逆の思念は、あくまで個の位相でその生命を生む[23]。

このように新川は個人に徹底的にこだわった。このことは新川自身の幼少体験にあると本人は回想している。父親の勤務地の関係で、北谷村嘉手納（沖縄島中部、現嘉手納町）

で生まれたために、彼には故郷がないというのである[24]。それゆえに共同体ではなく、個に着目していった。

② 岡本恵徳による最小単位―同心円の共同体

次に見る岡本は新川とは違い、個人と共同体との関係に着目した。よく知られている「水平軸の発想」である。

> 個人を軸にとらえなおせば、自己のまわりに、一定の「位置」と「距離」を持った他者の広がり（自己を中心とする同心円ふうな拡がり）として実感されるといえよう。そこでは、人間関係は、支配・被支配などの上下関係としてよりも、「位置」と「距離」が自分に近接にしているかどうかのかかわりとして、より強く機能しているようにみえる。そして次第にそれが遠い方へと広がる同心円ふうに意識されるのである[25]。
>
> このように横へのかかわりにおいて人間関係をとらえようとする発想のしかたを、わたしはかりに、“水平軸の発想”と名付けた[26]。

岡本の「水平軸の発想」は「人間関係を地理的もしくは文化的に近ければ近いほど緊密な関係がある」と想定している。この発想は、個人は他者との関わり合いから自己認識を行うという前提のもとに成り立っており、さまざまな共同体に重複して個人は存在しているということも説明されている[27]。

そして、沖縄戦において多くの人々が国家のために命を落としたのも、岡本によれば「水平軸の発想」によって説明される。

> 何故彼らが《国のため》に生を賭したかということになるのだが、それはほかならぬ《沖縄》が戦場であったということにかかっているのではないか、というのがぼくのひそかな想像である。家・家族―ムラ―同胞―郷里という同心円に広がる意識、その同心円の外延として《国・国家》を想定していく＜水平軸の発想＞による国家意識が、国を守ることと郷里や家を護ることをそのまま結びつけたのではないか、というのがぼくの想定なのだ[28]。

岡本のこのような考え方も、個人的経験が大きく作用していることが論考から読み取れる。琉球大学を離れ東京教育大学に転入するため上京する際、岡本は沖縄の個人を縛りつける血縁共同体的な人間関係から脱出することを希望としていた[29]。また、沖縄における共同体の相互のかかわりと断絶は、自身が幼少期から高校卒業まですごした宮古島で特に問題になるとしている[30]。

③ 川満信一による最小単位―村落共同体

新川は個人を重視し、岡本は個人と共同体の関係に着目していたが、川満は村落レベルの共同体を重要視した。

〔村落〕共同体的要素が、現実の社会行為を規定するだけの力を保持していると見なければならない[31]。

沖縄および日本人の知識人の自我は〔略〕全能の唯一神との格闘という個孤の位相ではなく、まずその出自であるところの共同体ないし民衆に対する意識の距離測定としての位相をとるしかない[32]。

川満によれば、個々の活動や社会を規定するのはあくまで共同体であった。人はすべて「集団で生まれ、集団で死ぬ」しかない状況に今日置かれているのであり、そのことを前提としない個人の解放などは、まったくもって見当はずれであった[33]。

また、村落レベルとは具体的には方言の通用する範囲であり、もっとも細分化すれば100人程度の集団とされる。方言に着目するのは、言語の問題は究極的には個人の内部の世界にいきつくからである、とされている[34]。このような考え方に基づいて社会、特に民衆を分析するためには共同体を対象とせざるを得ない、というのが川満の主張であった。

民衆とは一体どのような存在の仕方を指すのか。そしてそのように存在する民衆は、如何様な歴史のエートスを条件としているのか。といった問題が浮かび上がり、そこにおいて、島々の村落共同体を出自とする民衆の、現存の基層を掘り起こすためには、共同体そのものを対象化しなければならないという課題の必然性に到達したのである[35]。

やはり川満も、沖縄の村落共同体の特質、とりわけ次節にて論じる共同体における神概念については自身の幼少期の経験から得られた見識であることに言及している[36]。

以上、概観したように、反復帰論者それぞれが沖縄を認識する際には各々異なる要素に着目していた。新川は個人、岡本は個人と共同体の関係、川満は村落共同体である。また、その認識の差異はそれぞれの個人的体験が大きな影響を与えていたこともあわせて確認した。次項では、その沖縄の最小単位がどのような規範によって行動をとると想定されていたのかを考察する。

(2)規範

本論でいう規範は、最小単位の行動を規定する思想および要因を指している。設定される最小単位が異なれば、その規範も当然異なる。本項では三者の論拠から規範を抽出し、まとめる。

① 新川明による規範―異質感

新川の論考においては、最小単位は個人にまで細分化されていた。そして沖縄における個々は当然ながら沖縄人と呼称される。その沖縄人を沖縄人たらしめるものは、沖縄人が

持つとされる異質感、もしくは差意識であった。

> みずからが沖縄人であることが先行して「日本人」であるより前に「沖縄人」であることに固執する。そのことは、沖縄においてその人が所属する階級をこえて普遍的な意識の態様である。〔略〕
>
> このような沖縄人の意識の特質とでもいうべき日本と日本人に対する「異質感」あるいは「差意識」は、近代に至るまで日本と別個の国家形態を形成し、かつ独自の文化的領域を占めてきた歴史的、地理的の諸条件によって培われてきたもので、明治の「琉球処分」のあと上から強権的に推進された皇民化や、それと対応して沖縄の側から熱烈に希求された同化（日本国民化＝日本人化）への努力にもかかわらず、沖縄人の意識の基層で今日なお脈々として生きつづけている[37]。

歴史的、地理的に形成されたというこの「異質感」は、時として「異族」性とも表現された[38]。しかし、科学的に沖縄人と日本人の間に差異があるかどうかは問題とされない。沖縄人の意識の中でどのように認識されるのかのみが、重要とされる。

> ことされに断わることもないことだが、そのことは沖縄人が学理的な意味で日本民族の紛れもない一員であるか否かというたぐいの議論とは無縁（次元が異なる）のことであり、あくまで沖縄人の個人的位相における意識の中で、「国」あるいは「日本＝ヤマトゥ」がどのように知覚されつづけるのか、という問題として把握されなければならない[39]。

それではこのような「差意識」および「異質感」は、沖縄人をどのように行動させるのだろうか。新川はその「差意識」が復帰思想を否定し、日本の国家権力を相対化する要因であるという。

> 沖縄人の意識の基層を規定している日本と日本人に対する「異質感」＝「差意識」を、否定すべきマイナスの精神志向だとして恥じ、これを否定し、排撃するのではなく、むしろ逆に、これを日本の国家権力を決定的に相対化していくための、決定的なプラス要因として思想的に取り込むことこそ迫られていると私は考える[40]。
>
> 沖縄人が日本（人）に対して根強く持ちつづける「差意識」を、日本と等質化をねがう日本志向の「復帰」思想を根底のところから打ち砕き得る沖縄土着の、強靭な思想的可能性を秘めた豊饒な土壌と考えるのである[41]。

新川にとって沖縄人であることは、言語や文化など客観的な要素によって決定するのではなく、日本から距離を置き、相対化することによって存在できる思想的営為に他ならな

かった。

② 岡本恵徳による規範―共同体的意識

新川は個人に着目し、その規範として沖縄人を沖縄人たらしめる「異質感」を想定したが、岡本による規範は共同体の持つ「共同体的意識」であった。

> 個人が意識的・無意識的にとる行為の原理、あるいは個人の行為の是非を判断する価値の基準が、内面的な規範となったところの＜神＞や主体的に獲得した論理（思想）ではなく、その個人の帰属するところの「共同体」の意志にもとづく場合、そこに機能するものを「共同体的意識」または「共同体的生理」と呼んで差し支えないと考える。そこでは、個人の生活は「共同体的意識」にもとづくのであるから、「共同体」の存続がその行為や判断の前提となり、それにしたがって「共同体的意識」や「共同体的生理」は機能する[42]。

岡本によれば、「異民族支配からの脱却」というスローガンの下で展開された沖縄の復帰運動が高まった理由も、「共同体的意識」を基盤とした「民族主義」という心情的要素によるもの、として説明される[43]。

また、岡本の想定した「共同体的意識」の具体的な発露は、共生共死という形をとる。

> 〔「共同体生理」の機能について〕“たとえ自分がひとりだけ生き残ったとしても、全ての人間が死んでいくのならば、自分だけが本当に生き残ることができるであろうか。全ての人が「死」という過酷に耐え得ないとき、おのれのみが生きながらえることはできない”という意識がはたらいていなかったとはいえない。あるいはまた、“更に苛酷で絶望的な状況しか残されていないのであれば、老人や幼児を、そのような状況にたちあわせるにしのびない。むしろ共に死をえらぶことがよいのだ”する価値判断が働いていたとも言える[44]。

岡本は、共生共死の「共同体的生理」が悲劇的に表出したのが、沖縄戦時、渡嘉敷島で発生した「集団自決」[45]であったという。しかし岡本はこの「共同体的意識」を否定するのではなく、出来るだけ積極的な意味を持たせようとする。「共同体的意識」は本来、共同体に属する人々を護り、共に生きる方向に働くものであると岡本は言う。それが外部からの条件によってゆがめられたのが、渡嘉敷島の「集団自決」であった[46]。

「水平軸の発想」はいわば、「集団自決」という悲劇的な形で明らかになった「共同体的意識」から共生という隠れた意味を見出すことによって、沖縄にあるべき共同体像を提示したといえるだろう。

③ 川満信一による規範―共生の志向

岡本は共同体の中に「共同体的意識」を見出した。それは一言でいうならば「共生共死」の思想であった。川満もやはり、個人よりも共同体が持つとされる意志に着目した。体験的かつ相対的な共同体の規範によって個々は価値判断を行う、という[47]。

しかし川満は岡本よりも積極的な意味づけを行う。それは「共生の志向」と呼ばれた。そしてその由来には、村落共同体に存在するシャーマニズムを指摘した。

川満によればヨーロッパの共同体は一神教であるのに対して、沖縄および日本の共同体は多くの神々を持つ、とされる。しかし、沖縄と日本の多神性には決定的な違いがあると川満はいう。日本の神々には天照大神に表されるように上下関係の構造を持っているのに対し、沖縄の神々は同位概念が強く働いている、というのである。そこから生まれるのが、「共生」の志向とされる。

> 神々が同位概念で存在させられている、ということは、共同体成員の個々の関係でも同位概念が強く働いている、ということであり、そこから『共生』の志向も生じてくることになる[48]。

また、この同位概念の神々は、沖縄でも「僻地」、つまり沖縄島北部や宮古、八重山のような地域で顕著であり、首里王府では垂直神の信仰が強いことにふれ、その理由を政治社会としての職業的階層化が進んだ結果であると指摘している[49]。

川満にとって、神話やシャーマニズムに由来する「共生」の志向は、ナショナリズムに集約されることなく、近代化される社会において回復されなければならないものである。そして、今日、村落共同体的相互扶助を失った人々の「共生」の志向が向かうさきは国家にあり、ナショナリズムへと吸引されるほかはない、と川満は言う。その結果、ナショナリズムによって固められた国家によるものではない、「あらたな共同体の創造」[50]が課題とされるのである。

3　反復帰論者にとっての抵抗対象

ここまで、反復帰論者たちが沖縄をどのように捉え、描いてきたのかを見てきた。その結果、新川は「異質性」に根ざす個人によって、岡本は「共同体的意識」が働く個を中心とした共同体によって、川満は「共生」の志向を持つ村落共同体によって沖縄を捉えてきたことが明らかになった。そこで本節では、反復帰論者たちがなぜそのような沖縄を描いたのかを見ていく。反復帰という言葉から明らかなように、彼らは沖縄の日本復帰に反対したことは前述したとおりである。それでは、彼らは沖縄を日本復帰へと導いてしまった要因は何であったと認識していたのか。そして彼らが想像した沖縄は何に抵抗するために描かれたのか。端的に言うことが許されるのであれば、彼らの「敵」とは何であったのかを見ていく[51]。

(1)新川明にとっての抵抗対象

新川は沖縄を日本へ復帰させたのは、国家権力の作用であったと考えた。国家権力の作用とは、つまるところ明治以降沖縄人を日本志向へと向かわせた皇民化政策であった。沖縄人に求められることは、その国家権力を認識し、自己の中で国家へ寄りかかる心情を断ち切ることであるとされた。新川は反復帰を「反国家＝反国民としての自己を確保し続けるための命題」と表現している[52]。

ここで注意したいのは、あくまでも国家が抵抗対象であり、単に日本ではないということである。異質性、異族という認識は日本と比較した場合に発生するものであったが、敵は日本ではなく、＜国家としての日本＞となっていた。

> 沖縄から日本に対して強固な差意識＝異質性を徹底的に、果てしなく突きつけていく反国家の思想を、すべてのたたかいの組織と実践における発想の根底に据え、＜国家としての日本＞の存立自体を否認していくたたかい[53]

沖縄人に固有とされる異質性が規範であれば、その抵抗対象は単に日本と設定されても不自然ではない。しかし、新川は沖縄人の固有性から、抵抗対象を国家という普遍的な存在に措定した。日本における天皇制も、それ自体が抵抗対象ではなく、天皇制を支えてきた人々の意識構造が問題とされる[54]。

新川が沖縄の特殊性を訴えながら、克服すべき対象として国家という普遍的な道を設定できた背景には、同時期に唱えられていた琉球独立論との差別化を図る狙いも考慮されよう。山里永吉に代表される当時の琉球独立論は、アメリカ統治下における利権の守旧を目的とされていた。新川はこの守旧的琉球独立論と自身の反復帰論を混同されることへの警戒を明らかにしている[55]。新川が守旧的琉球独立論を批判した理由としては反復帰論が反国家、反国民的であったから、という指摘がある[56]。しかし、逆に言えば親米で守旧的琉球独立論と同一視されることを嫌ったために、反国家、反国民という普遍的な議論を展開したとも解釈できないだろうか。親日でも親米でもない、第三項としての反復帰ということである。

(2)岡本恵徳にとっての抵抗対象

岡本は渡嘉敷島で発生した「集団自決」を、「共同体的意識」が歪められた結果であると考えた。その「共同体的意識」を歪めた要因は国家の意志であった。本来、「水平軸の発想」では、共同体における個人は相互の具体的な関わりのなかから自己を位置づけ、共同体の意志はその関わりの中から生み出される「秩序感覚」が合わさったもの、と理解された。しかし支配者は、その支配の意志を「共同体的意志」として民衆に幻想させることによって、支配を容易にした。さらには民衆側も意識的にその支配の意志を共同体的意志と幻想

することによって支配がスムーズに行われた、というのである[57]。明治以降の沖縄が求めた近代化も、この民衆側が積極的に求め、適応しようとした国家の意志への反応であるとされる[58]。

岡本によれば、明治政府の皇民化政策において、「共同体的意識」が沖縄を支配するために機能的に用いられるようになった。すなわち、共同体の頂点に天皇を据え、その共同体の構成員として沖縄の人々を組み込むという作業が皇民化であった。支配者としての国家が、その意志を具現化したものが、天皇制であったということである[59]。

岡本のいう「共同体的意識」は決していい方向に作用するだけのものではなく、有害になる場合も多々想定されていた。沖縄の民衆を動員することができる大きなパワーを持っているのが、「共同体的意識」である。復帰運動では、民族的排外主義として作用した、と岡本は言う。

> 〔「共同体的性格」を〕強いて政治的営為の基盤にしようとするのならば、それはかつて復帰運動の中にみられた民族的排外主義として機能するに留まるであろう。このような民族排外主義は、「共同体的性格」の日常の次元に機能する実効性の肥大した現象といえるからである。
>
> 沖縄に生きる人間のありようを捉えるとき、このような「共同体的性格」を濃厚におびた意識のありようを無視することはできない。しかし、そのような意識が存在するということだけであるならば、そして、その意識のありようを機能的に実効性の側面で捉えるならば、これは状況の変質した現在では無力であるばかりでなく、かえって有害であるといえよう[60]。

強力な力を持っている共同体的意識だからこそ、その機能を利用して「人間の“自由性”を圧殺する権力的支配の構造にあらがう“思想”を追尋する」[61]ことが求められているのである。

(3)川満信一にとっての抵抗対象

川満もやはり抵抗する対象としてまず国家をあげる。猛烈な復帰運動を目の当たりにした川満にとって、国家主義へと回収される沖縄の人々に必要なことは国家を相対化することであった。それが民衆の自立できる条件とされた[62]。

川満によれば、国家による支配イデオロギーが天皇制であった。そして沖縄において天皇制が定着した根拠として、村落共同体の性格に触れている。すなわち、沖縄では琉球王国時代より、祭祀と政治の間に強い関係があり、民衆もその関係を受け入れてきた。沖縄の民衆には、宗教性を強く持った支配者を受け入れる素地があった、というのである。そして今日では村落共同体よりも国家が強い吸引力を持っているため、民衆は国家へと吸い寄せられていく、と説く。

村落共同体を見捨てたものも、また村落とともに見捨てられたものも、その本能としての相互扶助、全体性を求める志向は、国家の側にその実現を仮託し、観念としてのナショナリズムへ吸引されるしか方途はないだろう[63]。

川満は村落共同体を脅かすものとして、資本主義も列挙する。超国家規模で結びつく資本は、沖縄においては地域振興という建前をとりながら実際には村落共同体を破壊していく。沖縄の日本に対する幻想には、「沖縄の近代工業化」という憧れも大きな要素としてあった。しかし、村落共同体の持つ、かつて天皇制へと吸引された純粋なナショナリズム自体は悪ではないが、それが資本主義と結びつき、民衆への搾取と抑圧になったときに、最大の悪になる、というのである[64]。

資本主義に基づく農地私有制を、もう一度何らかの形の共有制へ変革し、各単位の協働組織を確立していく、具体的なスケジュールが提案されない限り、島々の村落共同体のなかで継承され、存続させられてきた“共生”への志向は、都市プロレタリアの変革と志向と切り結ぶ創造性を開花し得ないまま、観念的ナショナリズムへ吸引され、ファシズム形成の基礎となるだけである[65]。

経済の活性化、地域振興という名目で行われる経済活動は、経済的な搾取だけではなく、民衆の政治的自律性を失わせ、支配の対象におとしめるということである。国家権力の存在と資本主義の結びつきについて言及している点では、他の 2 人とは違う視点を持っていたといえよう。

おわりに

これまで、反復帰論者によって沖縄がどのように捉えられ、描かれてきたかを最小単位と規範、そしてその抵抗対象に着目して見てきた。表にまとめると下記のようになる。

表：抵抗する「沖縄」の構造とその抵抗対象

	抵抗の拠点となる「沖縄」		抵抗対象
	最小単位	規範	
新川	個人	異質性（異族）に根付く自己認識	国家／天皇制
岡本	個人を中心とした同心円の共同体	共同体的意識	国家／天皇制
川満	村落共同体	「共生」への志向	国家／天皇制

本章は反復帰論の全体像を捉えようとする試みであったが、ここまでで明らかになった点をまとめたい。

まず、最小単位については三者とも異なった単位を想定していた。しかしそれは、個人と共同体のどちらに重きを置いたかの違いであり、三者の最小単位の相違は個と共同体の関係性の捉え方の差異に由来するとみるべきであろう。次に最小単位が極めて沖縄に由来したものとして考えられている点が特徴的である。前章で論じたように、反復帰論者は1950 年代の『琉大文学』時代からマルクス主義リアリズムの影響を強く受けてきた。その彼らが階級ではなく民族性を前面に出し、沖縄民族意識を継続していることがここで確認されよう。規範に関しても、反復帰論者は沖縄固有の特質に注目していた。そして個人もしくは共同体を規定しながら沖縄の独自性をもたらす規範が、いかに日本国家によって絡め捕られ、国家主義へ変質することを余儀なくされたのかを論じた。そして反復帰論者にとっての抵抗対象は、三者ともに国家および国家権力であった。そこでは国家によって歪められた沖縄独自の規範という価値を、本来の姿に取り戻す必要性が強調された。その時、彼らは自らが失望の念を抱いた日本を直接批判するのではなく、国家の暴力性および支配者のイデオロギーを批判した。天皇制は支配者イデオロギーが具現化したものとして表現されており、日本そのものとしてはみられなかった。このことは、規範としての固有の民族性に立脚した上で、普遍的な国家権力、支配の暴力を批判したということを意味する。いうなれば、ネイションに根ざしてステイトを否定した、ということである。また、彼らの論理構成には個人的経験が強く意識されていることもあわせて確認しておくべきであろう。

最後に、反復帰論者は各々が設定する最小単位の関係については強く意識していなかったようである。たとえば、沖縄島と宮古・八重山間にあるヒエラルキーについては言及されるが[66]、個人と個人の関係のような、最小単位間の相互作用に関する議論は見い出しづらい。最小単位間の関係は、「沖縄の範囲」という問題と関わるが、彼らの論考を見る限り沖縄の範囲については不明瞭であった。このことは、沖縄の範囲が所与のものとして、あまりに当たり前に捉えられていたか、もしくは沖縄という概念が空間的なものではなく、拡散し果てしなく広がっていくものとして捉えられていたかのどちらかであると考えられる[67]。

なぜ沖縄は日本へ「復帰」したのか。あるべき沖縄とはどのようなものか。

これらの問いへ真正面から取り組んだ反復帰論は今日でも多くの議論で参照され、いまだ影響力を持ち続けている。このような議論を積み重ねてきた反復帰論への全体的な理解がより深まることによって、その可能性と限界が見えるのであれば、沖縄をめぐる思想的営為の基礎は広く、強固なものになるであろう。

1 高良勉「解題」沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集』第 18 巻評論Ⅱ（国書刊行会、1992 年）373-374 頁。

2 屋嘉比収「自らの内側を穿つ思想―新川明の反復帰論」『前夜』第 8 号（NPO 前夜、2006 年）89 頁。

3 仲里功「ふるえる三角形　いまに吹き返す＜反復帰＞の風」『世界』12 月号（岩波書店、2006 年）131-132 頁。

4 本論における社会単位および規範という概念は、国際関係論の議論を元にしている。国際社会は主権国家によって構成されているという古典的な解釈に対して、今日ではグローバリゼーションの影響により、国際社会における行為体は国家のみではなく非国家行為体の活動が無視することができなくなった。これらの社会単位は国家と比較して脱領土的であったり、動態的であったりする。このような多様な社会単位を分析する際にはアイデンティティに着目するのも一つの方法である。ここでいうアイデンティティは社会的動員と深くかかわっている。また、国際政治理論における規範の機能としては、大きく 2 つに分けて考えることができる。1 つは行動を規制することであり、もう 1 つは行為体のアイデンティティを構成するという働きである。特にコンストラクティビストは両者の相互作用に着目する。すなわち、規範にアイデンティティが形作られ、そのアイデンティティに基づいた行動が規範（構造）に影響を与える、ということである。本論で扱っている反復帰論者も明示的にしろ暗示的にしろ、規範とアイデンティティの相互作用について思慮していたと考えられる。多賀秀敏「国際社会における社会単位の深層」多賀秀敏編『国際社会の変容と行為体』（成文堂、1999 年）、山梨奈保子「国際関係における規範概念の再検討」『法学政治学論究』第 55 号（慶應大学大学院法学研究科内『法学政治学論究』刊行会、2002 年）、137 頁。Jepperson, Ronald L. Alexander Wendt, and Peter J. Katzenstein. “Norms, Identity, and Culture in National Security.” In: Katzenstein, Peter J. (ed.). *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*. New York: Columbia University Press. 1996. pp. 54-55.

5 新崎盛暉『戦後沖縄史』（日本評論社、1976 年）、291-299 頁。

6 我部政男『近代日本と沖縄』（三一書房、1981 年）、191-195 頁。

7 新川、前掲書（2000 年）、82 頁。

8 新川明・小熊英二「沖縄現代史と＜反復帰論＞（インタビュー）」『InterCommunication』第 47 号（NTT 出版、2004 年）、133 頁。

9 岡本恵徳「水平軸の発想―沖縄の共同体意識について―」谷川健一編『沖縄の思想』（木耳社、1970 年 a）、162-163 頁。

10 新川明「『非国民』の思想と論理」谷川健一編『沖縄の思想』（木耳社、1970 年 a）、10-13 頁。

11 新川明『反国家の兇区』（現代評論社、1971 年 a）、303-306 頁。

12 新川、前掲書（1970 年 a）、58 頁。

13 同上、48-50 頁。

14 岡本、前掲書（1970 年 a）、177-178 頁。

15 同上、188-191 頁。

16 川満信一「沖縄における天皇制思想」谷川健一編『沖縄の思想』（木耳社、1970 年）、120-126 頁。

17 西里喜行「沖縄における「反復帰論」とその周辺」『民主文学』第 70 号（日本民主主義

文学会、1971 年)。

[18] 大田昌秀「沖縄反復帰の思想的原点―復帰にかける沖縄の心―」『月刊社会党』12 月号（日本社会党機関紙局、1971 年)。

[19] 日本共産党中央委員会出版局「沖縄問題とイデオロギー闘争」『前衛』第 326 号（日本共産党出版部、1971 年)。

[20] もっとも、例えば新川は、当時を振り返って「新左翼であれ既成左翼であれ、沖縄の奪還だとか、解放だとか、余計なことをぬかすなという感じはあった」と回想している。新川・小熊、前掲（2004 年)、141 頁。そこから、新川は心情的にはいわゆる新左翼、既成左翼の両者とも距離を置いていたことが推察される。

[21] 新川明「＜復帰＞思想の虚妄」『現代の眼』1 月号（現代評論社、1971 年 b)、134 頁。

[22] 新川明「『差別告白』から『反逆』の持続へ」『朝日ジャーナル』7 月 2 日号（朝日新聞社、1971 年 c)、14 頁。

[23] 同上、17 頁。

[24] 新川明ほか「反復帰論と同化批判―植民地下の精神革命として（座談会)」『季刊前夜』第 9 号（NPO 前夜、2006 年)、67 頁。

[25] 岡本、前掲書（1970 年 a)、182 頁。

[26] 同上、183 頁。

[27] 同上、182 頁。

[28] 岡本恵徳「唐獅子」『沖縄タイムス』(1969 年 11 月 8 日)。

[29] 岡本、前掲（1970 年 a)、140 頁。

[30] 岡本、前掲書（1970 年 a)、183 頁。

[31] 川満信一「共同体論（上)」『新沖縄文学』第 32 号（沖縄タイムス社、1976 年 a)、26 頁。

[32] 同上、27 頁。

[33] 川満信一「民衆論」『中央公論』6 月号（中央公論社、1972 年)、91 頁。

[34] 川満信一「ミクロ言語帯からの発想」『現代の眼』1 月号（現代評論社、1971 年)、159 頁。

[35] 川満信一「共同体論（下)」『新沖縄文学』第 34 号（沖縄タイムス社、1977 年)、51 頁。

[36] 川満、前掲（1976 年 a)、34 頁。

[37] 新川明「幻想としての＜日本＞」『中央公論』9 月号（中央公論社、1971 年 d)、243 頁。

[38] 新川、前掲書（1970 年 a)、22 頁。

[39] 新川、前掲（1971 年 d)、243-244 頁。

[40] 新川明「＜憲法幻想＞の破砕」『現代の眼』11 月号（現代評論社、1970 年 b)、33 頁。

[41] 新川、前掲書（1970 年 a)、22 頁。

[42] 岡本、前掲書（1970 年 a)、181 頁。

[43] 岡本恵徳「沖縄“施政権返還”その後」『思想の科学』第 15 号（思想の科学社、1973 年)、49 頁。

[44] 岡本恵徳「『沖縄に生きる』思想―『渡嘉敷島集団自決』の意味するもの」『労働運動研究』第 9 号（労働運動研究所、1970 年 b)、63 頁。

[45] 「集団自決」という用語は、自ら死を決意したという意味に解釈されかねず、当時の軍、社会状況および教育による影響を反映していないという意味で、現在では「集団自決」にかわる用語として「集団死」および「集団強制死」が用いられることがある。例えば、石原昌家「『援護法』によって捏造された『沖縄戦認識』:『靖国思想』が凝縮した『援護

法用語の集団自決』」『沖縄国際大学社会文化研究』第 10 巻第 1 号（沖縄国際大学、2007 年）。本論でも本来であれば使い分けるべきであるが、当時の反復帰論者の論考の中では「集団自決」の方を用いているため、引用部分を除き鍵括弧で括った上で使用している。

[46] 岡本、前掲書（1970 年 a）、176 頁。

[47] 川満、前掲（1976 年 a）、33 頁。

[48] 同上、34 頁。

[49] 同上、35 頁。

[50] 川満信一「共同体論（中）」『新沖縄文学』第 33 号（沖縄タイムス社、1976 年 b）、210 頁。

[51] 新川は「『敵』を明確にすることは重要である」と述べている。「敵」概念についてカール・シュミットによれば「敵とは他者・異質者にほかならず、その本質は、とくに強い意味で、存在的に、他者・異質者であるということだけで足りる」という。しかし、両者の大きな相違点は新川が敵として国家を想定したのに対し、シュミットは国家が敵を設定するとした。「敵」概念と国家の関係が全く異なっており興味深い。新川、前掲書（1970 年 a）、35 頁。カール・シュミット（田中浩・原田武雄訳）『政治的なものの概念』（未来社、1970 年）、16 頁。

[52] 新川、前掲（1971 年 c）、14 頁。

[53] 新川、前掲書（1970 年 a）、40 頁。

[54] 同上、66 頁。

[55] 同上、67-68 頁。

[56] 小熊英二『＜日本人＞の境界』（新曜社、1998 年）、621 頁。

[57] 岡本、前掲書（1970 年 a）、186-187 頁。

[58] 同上、146 頁。

[59] 同上、188-189 頁。

[60] 同上、53 頁。

[61] 同上、53 頁。

[62] 川満、前掲書（1970 年）、77-78 頁。

[63] 川満、前掲（1976 年 b）、211 頁。

[64] 川満、前掲書（1970 年）、128-129 頁。

[65] 川満、前掲（1976 年 b）、211 頁。

[66] 新川明「内なる『辺境』から」『日本読書新聞』、（1970 年 1 月 1 日）。

[67] 仲里は反復帰論に沖縄とアジアとの共通の深層として、植民地主義の記憶を見出す。仲里功「アジアという目線」読売新聞西部本社文化部編『対論「沖縄」問題とはなにか』（弦書房、2007 年）、116-118 頁。